新しいコレクション

テオドール・ボーグラー《コンビネーション・ティーポット》

テオドール・ボーグラー（1897-1968）
《コンビネーション・ティーポット》

1923年
陶器、籐
高さ 12.0（把手部分は除く）, 幅21.0, 奥行15.5 cm
バウハウス陶器工房
平成27年度購入
©ars liturgica Klosterverlag MARIA LAACH

本作は、バウハウスの陶器工房で中心的な役割を果たしたテオドール・ボーグラーのデザインによるティーポットです。「コンビネーション（組合せ式）」とは、注ぎ口、蓋、高台のついた本体、把手をつける穴などの各パーツを、型を用いて個別に成形し、組合わせることで、多様な形態のティーポットができ上がることに由来します。

このティーポットのアイディアを、ボーグラーは、一九二三年の「バウハウス展」の図録に「工場での大量生産のための組合せ可能なティーポットの石膏型」として掲載しています。ちなみに石膏型は、バウハウスの石彫工房との共同作業で作られたといいます。

「コンビネーション・ティーポット」のアイディアに先立ち、ボーグラーは、「バウハウス展」で発表された実験住宅のために、キッチンで使われる保存容器をデザインしました。この容器は、どの家庭でも使われる基本的な調味料や食品――酢、油、スパイスや小麦粉等――を保存するための標準設備として、産業陶器の製造技術を念頭において開発されました。形態は、半球、円柱、円錐といった幾何学的な基本要素に還元され、器の外側に、中身を示す文字がつけられただけの簡素なつくりで、ベルリン郊外のフェルテン＝フォルダム陶器工場で、原型が作られ量産されるようになりました。本作品でも同様に、従来のティーポットの形態を個々の要素に分解し、それぞれを幾何学的な基本形態に還元することで、ボーグラーは量産化可能なデザインを目指したのです。

基本的なパーツを組合わせてバリエーションを得るこの方法は、当時「芸術と技術――新しい統一」に向けて、バウハウスの校長ヴァルター・グロピウスが建築の分野で提唱したモジュール・システムを、陶の分野で実践し、工業化への道筋をいち早く示したものとして高く評価されました。

一九二三年末に工房に新設備が導入され、型による製陶が可能となると、「コンビネーション・ティーポット」の生産がはじまります。最終的には産業へと引き継ぐことを目的にしていましたが、各パーツの組合せは手作業に頼るしかなく、生産工程の複雑さや、陶土のコントロールの難しさなどがネックになり、とうとう量産には至りませんでした。一九二四年末には、ボーグラーが工房を去り、また翌年には、バウハウスがデッサウに移転します。設備や人員の面から、陶器工房はデッサウでは開設されませんでした。

工房での生産期間も一年程度でしたが、《コンビネーション・ティーポット》に見られる単純明快なバウハウスの造形言語、各パーツの組立てによる空間構成法は、産業か個人制作かを問わず、現代にも大きな影響を与え続けています。

（工芸課主任研究員　北村仁美）